

二松學舍創立百二十周年記念出版

原著 文学博士 三島 毅

新修中洲講話

新修中洲講話

PDG

二松學舎創立百二十周年記念出版

原著 文学博士 三島 毅

新修 中洲講話

学校法人 二松學舎

新修 中洲講話

原著 文学博士 三島 毅

二松學舎創立百二十周年記念出版
平成九年十月十日 発行

〔非売品〕

新修編著 中 田 勝

発行者 小林日出夫

発行所 学校法人 二松學舎

新郵便番号 一〇二・八三三・六
東京都千代田区三番町六番地
電話 〇三(三六)七四〇七(代)
振替 〇〇一・〇・六一七二二四六

印刷 株式会社明德印刷出版社
製本 株式会社ケイエムエス

新　　序

徳川幕府が崩壊して明治になると、長い鎖国政策で欧米に後れをとった制度や技術を取り戻すことに急なあまり、旧来国民の精神を作り、教養の中心となっていた漢学を捨てて、国を挙げて欧米に追いつくことに現をぬかした時代、先師・三島中洲は草深い備中松山で、これではいかん、これでは国は滅ぶ、何とか漢学を振興させて、日本人としての自覚を取り戻さねばならぬ、と心痛の日々を送っておられた。

十五代将軍・慶喜の下で最後の老中であつた藩主・板倉勝静が朝敵の汚名を蒙って、政府から受けていた禁錮の処分が、明治五年一月六日に解除され、「もう名節にこだわる謂れはなくなった。我が方寸惻怛不忍の心こそ天地生生の造物者であり、心さえ正しければ、造物者の意に叶うか叶わぬかは明白である。心に恥じるところがなければ、天意に叶っているのだ。もう勤皇も佐幕もない。これからは一国民として新政府に出仕し、天下蒼生のために万々御賢勞下さる様に」と、恩師山田方谷に励まされて、先師が東京に出仕されたのはその年の八月、直ちに司法省に配属され、新治裁判所長、大審院判事の職を歴任、十年十月十日現在の千代田区三番町の大学本館のある私邸に、二松学舎を創設されたのである。時に先師四十八歳、以後、東京大学教授、東宮御用掛、宮中顧問官等々、大正八年五月十二日九十歳で逝去されるまで、

時流に迎合されることなく、儒教一筋の生涯を貫き通されたのである。

本年創立百二十周年を迎えるに当り、平素は忘れかけてはいても、こうした節目の時には、まず創立者の志を振り返り、それをどう現代に生かして行くかを考えることが肝要で、ために最初は散逸されている先師の資料を集めて、何とか三島中洲全集と名づけられるものを作りたかったのであるが、私自身学外にいたことが長く、母校に戻ってまだ六年、全集を作るには時間も資金も人もすべてが不足している現実を実感し、これは今後十分な準備を重ねて、百五十周年に上梓されることを期待し、今回は、百周年記念に元本学会長波沢栄一の「論語講義」を復刻した先例に倣い、先師の「中洲講話」をここに復刻することにしたのである。経書の私録や講義、詩文類は研究者はともかく、一般には縁が遠い學術書。先師の考えや思想が最もわかり易く描かれているものがこの書だからである。

本書は、学士会院、斯文会等で先師が講演された三十篇が収録され、明治四十二年十一月文華堂書店より公刊されたものである。先師の学問は、その師山田方谷から受けた儒教で、「孔学を奉じ古今の諸家を折衷す。最も姚江を好む。」と自身述べられているように、孔子の思想学問を時代の中に生かした王陽明その人の陽明学である。本書三十篇のいたるところに引用され、それをどう現代に生かすか、その実学の功夫が先師の肉声で刻まれている。先師を語るには最も相応しい一書である。なお、現在本学では文部省の科研費を使って、戸川芳郎教授を中心に「三島中洲の総合研究」が進んでいる。明年には刊行の運びで、

先師の学問が新しく人々に息吹を与えることが期待されるのである。

この新修版は、内容は旧版そのままであるが、今日の読者に読み易いように若干の工夫を加えてある。また旧版の速記者の誤謬も訂正した。この作業は本書を自らの講義にも用い、かつ中洲関係の著作も多い本学名誉教授中田勝氏にお願いした。どうか読者諸賢、先師の一行、一句の中から、自らの生き方に活かせるものを学びとって欲しい。戦後五十年、日本人の心を失いかけている人々の多い今日、読者が活かした先師の一行が、再び日本に活力を取り戻す転機ともなれば、望外の幸せである。御味読、御活用下さい。

平成九年十月

学校法人二松学舎理事長 後学 小林日出夫 識す

序

中洲三島先生は、少くして方谷山田子に従ひ、陽明良知の学を受く。やや長じて伊勢に、江都に遊学し、拙堂・一斎の諸儒について、経芸を講貫す。訂交するところもまたみな一時の雋才異能の士なり。学すでに成り、帰りて松山藩に仕へ、ついで度支に任せらる。

この時に当り、外患まさに起り、国論沸騰す。藩主は幕府の閣老たり。先生は方谷と、力を竭して輔弼し、内外に周旋し、つぶさに艱楚をなむ。

中興の後、朝に仕へて法官となり、訟獄を聴断し、民法の成るや、実にその文を潤飾す。またかつて大學教授たり。今はすなはち東宮に侍講し、啓沃をもって任となす。

その学ぶところはかくのごとく、歴るところもまたかくのごとし。世途に老乎たり、事業に暨乎たり。学はいよいよ精しく、識はいよいよ高し。発明するところもまた少なからず。

實は庸劣にしてその藩を窺ふにたらずといへども、その世儒の古に拘へられ旧を守りて世用に適はざるものとは、おほいに徑庭あるはすなはち知るべきなり。

ここをもって門におよぶの士、みなよくその材を成す。出でては朝廷に布列し、処りては議士となり、

あるひは殖産興業し、称道すべきもの、数十百人なり。あに偉ならずや。

先生の著書は、群經の私録・詩文集等、みなすでに成り、逐次上梓す。而るに学士会院および諸学会に講説するところの国字稿は、いまだ輯録して書を成すにおよばず。久しくしてまさに散佚に帰せんとす。而も先生は顧みざるなり。舊はこれを惜しみ、かつてひそかにその目を録してもって蔵す。書肆文華堂はこれを聞き、舊を介して印行を請ふ。

先生・許さずして曰く、すでに私録・文集のあるあり、吾が学と文とを知らんと欲するものは、これを讀まばたれり。講説に至りては緒餘のみ。何ぞもって伝ふるにたらんやと。舊は因りて請ひて曰く、昔者朱晦菴に経注・文集あり、而してまた語録あり。その学をなすものは必ず焉を考ふ。王陽明もまた奏議・文集のほか、更に伝習録あり。その学をなすものは必ず焉を考ふ。みな門生輩と問答の語を録せるもの、今の講説とほぼあひ近し。推してこれを言へば、論孟もまた魯聖鄒賢の語録なり。すなはちまた今の講説とあひ近きことなからんや。先生はすなはち土苴もてこれを視るといへども、而して門におよぶの諸生および後にこれ先生に私淑するもの、あに得てこれを考ふるを願はざらんや。あにもって私録・文集の羽翼となすにたらざらんや。またあに後生を陶鑄し、国家有用の材を成すの一助たらざらんやと。

先生曰く、子の言もまた理あり。ただ語録・伝習録は、みな門人の輯録するところなれば、すなはち子・吾がためにこれを輯するも、また何の不可あらんと。

ここにおいてその稿本を乞ひ、校正しもって文華堂に授く。題して曰く、中洲講話と。刷印すでに成る。略その由るところを叙することかくのごとし。

明治四十二歳 己酉 十月上浣(じようかん²)にあり。

門人 越前の本城賛、謹しみて撰す。

(原漢文)

註

(1) 生歿は元治元年〜大正四年(西曆一八六四年〜西曆一九一五年)にして、越前(福井県)の人。賛は名、字(あざな)は実生、号は問亭。初め学を三島中洲に受け、のち重野成斎に師事し、考証に長じ、諸子に通じた。

(2) 十日間を旬という。月の上旬・中旬・下旬を、それぞれ上浣・中浣・下浣という。

例言

一、本書は、文学博士三島毅著「中洲講話」（明治四十二年十一月文華堂書店発行）の新装版である。但し、原著の附録（明史名臣品第、尚書今古文九家系表、親族図二葉とした三点の「表」）は省いた。

二、口絵の三島中洲先生肖像は二松学舎大学所蔵の画像を撮影したものである。

三、本書の配列と文体（片仮名書きの外国語も含む）は、原著（旧版）のままとした。但し、左記の諸点については、書き下し文に書き改め、また読み仮名・小見出しを新たに記した。

◇書き改めたもの

(1) 原著中の序（旧序）。漢文で表記の講話論題。本文中に引用の漢文。中洲先生作の漢詩および漢文で示されたものは、書き下し文とした（中洲先生作の漢詩・漢文はまたその原詩と漢文を併記した）。

(2) 原著の叙述文が時々、清音で記されているところがある。前後の読みを通して濁音が文意の通ずるところは、濁音にて清書した。

(3) 原著の文章は、句読点（。、）を打たずして、読点（、）で終始している。句点（。）がよろしからんと思うところはそのように清書した。

(4) 原著の長文の文章は、文意がとおるように改行した。

(5) 外国の国名は原則として片仮名に書き改めた。

◇加記したもの

(1) 原著の配列に従って、第一講より第三十講の文字を記した。また各講のそれぞれに柱を立て、小見出し（ゴシック体）を記した。

(2) 原著中の引用の書名には「『』」、諸書の編名には「」と、それぞれ一重・二重の括弧を施した。

(3) 原著中の漢字には、数えるほどしか読み仮名は施されていない、本書の清書に当り、どの講より読んでもよいように、漢字にはしばしばその読み仮名（同一漢字にしても意味の違いによって読みを異にする）をつけた。

(4) 原著中の文字の異同は、各講の篇末にそれぞれ註記した。また語釈並びに故事の説明も若干であるが記した。

四、本書の仮名遣は現代仮名遣に従った。なお、引用漢文・漢詩・その他の漢文を書き下しにしたものは、旧仮名遣のままとした。

また漢字は、辯・辨、餘・余の文字を除き当用漢字を用いた。

五、本書の新修編（清書・改行・小見出し・読み仮名・校正）のことは、本学の中田勝名誉教授がこれに当った。

六、巻末の中洲三島毅先生略年譜及び著書一覧は、発行者の指示に従って中田が執筆した。

新 序

徳川幕府が崩壊して明治になると、長い鎖国政策で欧米に後れをとった制度や技術を取り戻すことに急なあまり、旧来国民の精神を作り、教養の中心となっていた漢学を捨てて、国を挙げて欧米に追いつくことに現をぬかした時代、先師・三島中洲は草深い備中松山で、これではいかん、これでは国は滅ぶ、何とか漢学を振興させて、日本人としての自覚を取り戻さねばならぬ、と心痛の日々を送っておられた。

十五代將軍・慶喜の下で最後の老中であつた藩主・板倉勝静きよが朝敵の汚名を蒙つて、政府から受けていた禁錮の処分が、明治五年一月六日に解除され、「もう名節にこだわる謂れはなくなった。我が方寸惻怛しひびさ不忍の心こそ天地生生の造物者であり、心さえ正しければ、造物者の意に叶うか叶わぬかは明白である。心に恥じるところがなければ、天意に叶っているのだ。もう勤皇も佐幕もない。これからは一国民として新政府に出仕し、天下蒼生のために万々御賢勞下さる様に」と、恩師山田方谷に励まされて、先師が東京に出仕されたのはその年の八月、直ちに司法省に配属され、新治裁判所長、大審院判事の職を歴任、十年十月十日現在の千代田区三番町の大学本館のある私邸に、二松学舎を創設されたのである。時に先師四十八歳、以後、東京大学教授、東宮御用掛、宮中顧問官等々、大正八年五月十二日九十歳で逝去されるまで、

時流に迎合されることなく、儒教一筋の生涯を貫き通されたのである。

本年創立百二十周年を迎えるに当り、平素は忘れかけてはいても、こうした節目の時には、まず創立者の志を振り返り、それをどう現代に生かして行くかを考えることが肝要で、ために最初は散逸されている先師の資料を集めて、何とか三島中洲全集と名づけられるものを作りたかったのであるが、私自身学外にいたことが長く、母校に戻ってまだ六年、全集を作るには時間も資金も人もすべてが不足している現実を実感し、これは今後十分な準備を重ねて、百五十周年に上梓されることを期待し、今回は、百周年記念に元本学舎長渋沢栄一の「論語講義」を復刻した先例に倣い、先師の「中洲講話」をここに復刻することにしたのである。経書の私録や講義、詩文類は研究者はともかく、一般には縁が遠い学術書。先師の考えや思想が最もわかり易く描かれているものがこの書だからである。

本書は、学士会院、斯文会等で先師が講演された三十篇が収録され、明治四十二年十一月文華堂書店より公刊されたものである。先師の学問は、その師山田方谷から受けた儒教で、「孔学を奉じ古今の諸家を折衷す。最も姚江を好む。」と自身述べられているように、孔子の思想学問を時代の中に生かした王陽明その人の陽明学である。本書三十篇のいたるところに引用され、それをどう現代に生かすか、その実学の功夫が先師の肉声で刻まれている。先師を語るには最も相応しい一書である。なお、現在本学では文部省の科研費を使って、戸川芳郎教授を中心に「三島中洲の総合研究」が進んでいる。明年には刊行の運びで、

先師の学問が新しく人々に息吹を与えることが期待されるのである。

この新修版は、内容は旧版そのままであるが、今日の読者に読み易いように若干の工夫を加えてある。また旧版の速記者の誤謬も訂正した。この作業は本書を自らの講義にも用い、かつ中洲関係の著作も多い本学名誉教授中田勝氏にお願いした。どうか読者諸賢、先師の一行、一句の中から、自らの生き方に活かせるものを学びとって欲しい。戦後五十年、日本人の心を失いかけている人々の多い今日、読者が活かした先師の一行が、再び日本に活力を取り戻す転機ともなれば、望外の幸せである。御味読、御活用下さい。

平成九年十月

学校法人二松学舎理事長 後学 小林日出夫 識す

序

中洲三島先生は、少くして方谷山田子に従ひ、陽明良知の学を受く。やや長じて伊勢に、江都に遊学し、拙堂・一斎の諸儒について、経芸を講貫す。訂交するところもまたみな一時の雋才異能の士なり。学すでに成り、帰りに松山藩に仕へ、ついで度支に任せらる。

この時に当り、外患まさに起り、国論沸騰す。藩主は幕府の閣老たり。先生は方谷と、力を竭して輔弼し、内外に周旋し、つぶさに艱楚をなむ。

中興の後、朝に仕へて法官となり、訟獄を聴断し、民法の成るや、実にその文を潤飾す。またかつて大

学教授たり。今はすなはち東宮に侍講し、啓沃をもって任となす。その学ぶところはかくのごとく、歴るところもまたかくのごとし。世途に老乎たり、事業に暨乎たり。

学はいよいよ精しく、識はいよいよ高し。発明するところもまた少なからず。

〔註〕庸劣にしてその藩を窺ふにたらずといへども、その世儒の古に拘へられ旧を守りて世用に適はざるものとは、おほいに徑庭あるはすなはち知るべきなり。

ここをもって門におよぶの士、みなよくその材を成す。出でては朝廷に布列し、処りては議士となり、

あるひは殖産興業し、称道すべきもの、数十百人なり。あに偉ならずや。

先生の著書は、群經の私録・詩文集等、みなすでに成り、逐次上梓す。而るに学士会院および諸学会に講説するところの国字稿は、いまだ輯録して書を成すにおよばず。久しくしてまさに散佚に帰せんとす。而も先生は顧みざるなり。蕢はこれを惜しみ、かつてひそかにその目を録してもって蔵す。書肆文華堂はこれを聞き、蕢を介して印行を請ふ。

先生・許さずして曰く、すでに私録・文集のあるあり、吾が学と文とを知らんと欲するものは、これを讀まばたれり。講説に至りては緒餘のみ。何ぞもって伝ふるにたらんやと。蕢は因りて請ひて曰く、昔者朱晦菴に經注・文集あり、而してまた語録あり。その学をなすものは必ず焉を考ふ。王陽明もまた奏議・文集のほか、更に伝習録あり。その学をなすものは必ず焉を考ふ。みな門生輩と問答の語を録せるもの、今の講説とほぼあひ近し。推してこれを言へば、論孟もまた魯聖鄒賢の語録なり。すなはちまた今の講説とあひ近きことなからんや。先生はすなはち土直もてこれを視るといへども、而して門におよぶの諸生および後にこれ先生に私淑するもの、あに得てこれを考ふるを願はざらんや。あにもって私録・文集の羽翼となすにたらざらんや。またあに後生を陶鑄し、国家有用の材を成すの一助たらざらんやと。

先生曰く、子の言もまた理あり。ただ語録・伝習録は、みな門人の輯録するところなれば、すなはち子・吾がためにこれを輯するも、また何の不可あらんと。

ここにおいてその稿本を乞ひ、校正しもって文華堂に授く。題して曰く、中洲講話と。刷印すでに成る。略その由るところを叙することかくのごとし。

明治四十二歳 己酉 十月上浣(じようかん²)にあり。

門人 越前の本城賛、謹しみて撰す。

(原漢文)

註

(1) 生歿は元治元年〜大正四年(西暦一八六四年〜西暦一九一五年)にして、越前(福井県)の人。賛は名、字(あざな)は実生、号は問亭。初め学を三島中洲に受け、のち重野成斎に師事し、考証に長じ、諸子に通じた。

(2) 十日間を旬という。月の上旬・中旬・下旬を、それぞれ上浣・中浣・下浣という。